Osaka University Knowledge Archive

Title	中井竹山の子女について ： 『奠陰集』を中心に
Author(s)	井上, 了
Citation	懐徳堂センター報. 2009, 2009, p. 107-118
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24411
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

懐徳堂センター報２００９　（大阪大学大学院文学研究科・文学部 懐徳堂センター　二〇〇九年二月二八日発行）

中井竹山の子女について ―『奠陰集』を中心に―

井上了

懐徳堂の第四代学主であった中井竹山（一七三〇年～一八〇四年）は、革島順（じゅん）（貞淑、一七四一～一七八九）との間に多くの子女を設けた。しかしその多くは夭逝し、成人したのは四男蕉園（一七六七～一八〇三。懐徳堂預人）・七男碩果（一七七一～一八四〇。懐徳堂教授。中井天生・終子の曾祖父）・季女刀自（とじ）（綴（とじ）とも。一七七七～一八〇三。並河尚誠に嫁し寒泉らを生む。天生の曾祖母）の二男一女のみであったという。しかし、その余の竹山の子女が何人いたのかについては未だ定説がない。なお竹山には順のほかに妻妾は知られない。

そもそも根本資料となるべき竹山「貞淑婦壙誌」（第二次新田文庫Ｆ142「中井家歴代襄事録」および竹山の詩文集『奠陰集』に収）は、順について「前後十余産。」としか述べておらず、またたとえば「介庵先生柩」（第二次新田文庫Ｆ146）にも「先生（蕉園）兄弟十余人、皆早世、季弟独存。」としか記されていない。

竹山の没後に丸川松陰が撰したという竹山の壙誌（「中井家歴代襄事録」）は「配革島氏、生九男四女。」「季女帰並河尚誠、生二男一女而亡。」として「九男四女」という人数をはじめて記すが、後述するように竹山の娘は五名いたと思われ、松陰の情報には疑問が残る。蕉園の壙誌（「中井家歴代襄事録」）に「先生同胞九男四女、存其唯一弟曾縮。」と、碩果の壙誌（同）に「兄弟十三人」とあるのもこれと同系の情報であろう。

西村碩園『懐徳堂考』が

竹山は京都西岡の革島氏を娶りて、九男四女を生みしに、何れも夭折して、二男一女のみ育ちしが、革島氏は竹山に先ちて没しき、二男は第四子の蕉園と、第七子の碩果とにして、蕉園は先に没せしより、碩果家を継ぎ、一女は並河尚誠に適けり、即ち並河寒泉の母なり。

とするのも竹山壙誌に由来する説で中井天生が伝えた情報だと思われる。『懐徳堂考』はまた履軒について

履軒初め革島氏を娶りしが先きに没し、一男一女も亦夭せり、継ぎて中村氏を娶りしに、故ありて大帰せり、其の出に一男あり、即ち柚園なり。

ともするが、これは履軒壙誌に「配革島氏、先卒、有一男一女、亦早世。再娶中村氏、生男環、承厥後。」とあるのに基づくものか。要するに『懐徳堂考』に従えば、竹山の子は十三人（うち二男一女が成人）、履軒の子

は三人（うち一男が成人）ということになる。

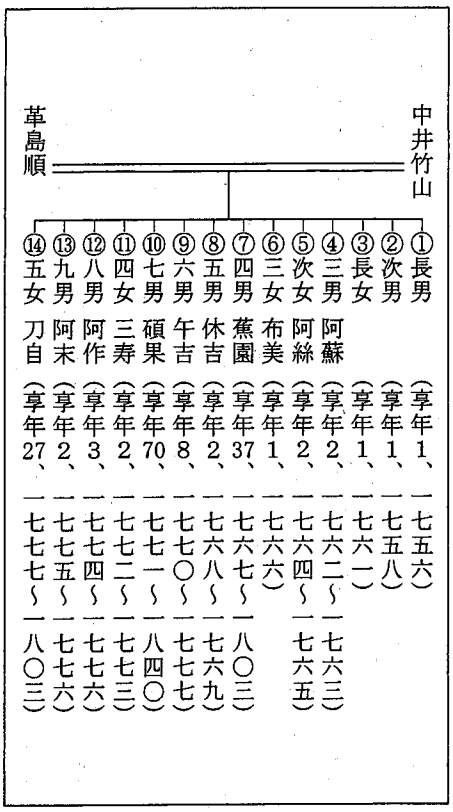
いっぽう小堀一正「懐徳堂と中井家と」（叢書・日本の思想家『中井竹山・中井履軒』明徳出版社、一九八〇年）には

竹山の子は十一人であったとも五男四女であったともいう

とあって異伝の存在を伝える。

繰り返すが、竹山の娘は少なくとも五人おり、男女あわせて十四人以上の子が竹山にはいたと思われる（左図）。また履軒と革島三輪（ミワ）（貞曜、のち貞耀）との間には一男一女の他にもう一男がおり、継室中村氏との間に設けた柚園とあわせて履軒にはすくなくとも四人の子がいたと思われる。つまるところ天生や碩園の所言は信じられない。

そもそも、天生・終子らの手許にはすでに竹山の子女に関する正確な情報が伝わっていなかったようだ。彼らが整理した中井家・並河家の系図が



第二次新田文庫に複数あるが、これらの相互には矛盾も見られ、確実な家伝によるものではなく壙誌や『奠陰集』などから二次的な復元を試みたものと判断される。中井家の墓所である誓願寺にも竹山の子女についての情報は残っていないということであったので、ひとまず竹山の漢詩文集『奠陰集』によって基礎的な確認を行い、『懐徳堂考』や『懐徳堂紀年』などの誤りをただしておきたい。履軒の詩文などによって追加すべき情報もなお存することは、あらかじめ断っておく。

竹山の長男（第1子）（一七五六～一七五六）

『奠陰集』詩集のうち「傷元児」に「吾生二十七、掌珠初特一。」とある。すなわち竹山は、その二十七歳、宝暦六年に第一子を失った。後に掲げる「祭阿蘇児文」に「初三子之生、皆不出其歳而亡。」とあるので、この子を含む竹山の第一子から第三子までは全て、生年のうちに死亡したこととなる。

第二次北山文庫『懐徳堂紀年』宝暦五年（一七五五）冬に「竹山挙児元吉、不育。」とあるが、この「五年」は「六年」の誤であろう。そもそも「貞淑婦壙誌」によれば、順が竹山が嫁いだのは宝暦六年となる。また『懐徳堂紀年』の「不育」は「旬余而夭」を塗抹訂正しているが、これも「傷元児」詩によるものと思われ、天生らが『奠陰集』を資料として用いることが確認される。竹山・順の間には、結婚の年の盛冬に長子が生まれ、生後十日あまりで死亡したものとなる。

傷元児（『奠陰集』詩集）

吾生二十七、掌珠初得一。生誕当盛冬、嗟而蒲柳之質。新試蘭湯罷、

已結腹心疾。愛重長且児、晨昏慎撫卹。不在慈媼懐、乃依阿母膝。量飢戒乳哺、伺啼問参求。闔門事護視、旬余不盥櫛。嘆息医和去、回生竟無術。空憶懸孤辰、喜色眉頭溢。親朋争慶賀、歓笑接堂室。酒饌席間陳、綬綳箱裡実。因祝日長成、孩笑要梨栗。幾時学語言、何年把紙筆。箕業能相続、冠昏志願畢。期望何太早、一朝為異物。家人具小柩、昏向蕭寺出。父子与祖孫、天地長相失。聚泣守空牀、通宵声唧唧。当吾少壮時、非無熊夢吉。所傷垂白親、閑却含餳日。

丙子冬抄示三宅文人（『奠陰集』詩集）

歳晏嗟吾病且貧、更堪喪子涙痕新。由来同調諳斯況、唯有東家宅丈人。

貞淑婦壙誌（『奠陰集』文集・「中井家歴代襄事録」）

婦名順、姓革島氏、洛師西岡革島邑人。世為著姓。其先佐竹氏。文治中受鎌府譴、避迹於此、因以氏焉。其裔仕足利氏、食近邑。織田氏時、以功任肥前守。食邑益多。及豊臣氏興、失封家居。至曾大父融和居士、称瀬左衛門。猶豪於郷邦。大父蚤寡。父兵庫名幸源、承重。妣為桑名氏、以寛保紀元辛酉歳生。十有六歳帰予于大阪。逮事舅三年、能得驩心。事姑三十年、敬愛兼至。姑氏無它嗜好、甚愛酒。以微醺為娯。乃日揀甘毳、割切烹飪、躬服其労。物雖微、而未嘗失薪火之候。姑氏欣然下箸。姑晩患末疾、晨夜侍養益謹。或忘寝食、汚穢衣物、手自澣濯。及歿、哀号不已。又痛念予老而執喪、飦粥蔬茹之食、加意致味、凡祭祀賓客之饋、委積蓋蔵之備、裁縫補綴之業、悉力経営。雖祁寒盛暑、未嘗懈弛。夜必視鐍、戒煬竈、無憾而後就寝。婢僕往往不令而従。家素清寠、務行節倹、佐予以勤敏、使予専力乎庠務。不復留意於家事。私親或贈綺紈布帛、挙以奉家長、給諸子、不敢自用。積久資装空闕、恬如也。交親嫺、不失雍和。遇衆隷、咸有恩意。四方問業於予、来寓者、随宜接待、宿食之節、皆能称其意。至幼学輩、撫之尤勗。有疾者、薬餌調護、必極其力。其母寡而病、予迎養。又取其幼弟甥女、鞠之如所生。知予喜賞民間孝義、傾意佐之、或先聞而慫慂焉。前後十余産、初連不育。人或進祈禳之説、善奉予訓、雖不学、而心暁其非、耳若不聞。男女子三。長名曽弘。次名曽縮。皆既冠。季女名刀自。未及笄数歳。其余皆殤。平日厳督諸子、未嘗以夭折之多而仮借焉。秪恐其成立不及人。寛政紀元己酉三日、嬰篤疾。四月朔、竟亡。享年四十有九。其墝在府下誓願寺先塋之次。私謚曰貞淑。

竹山の次男（第2子）（一七五八～一七五八）

次いで「妻満月安達共之偶寄宜男草既而挙児因喜賦謝」（詩集）によって竹山次男の誕生を知る。この子も生年の内に死亡したことになるが、「先君子貽範先生行状」（文集）に「孫男二、俱夭」とあるので、この次男は甃庵が没した宝暦八年六月十七日までに死亡していたものであろう。宝暦六年冬に長男が生まれておれば、翌年春に次男が生まれることは不可能であり、この次男は宝暦八年の春に生まれたものとなる。なお『奠陰集』詩集の「和東庵哭児韻」三首も長男または次男の死と無関係ではあるまい。

妻満月安達共之偶寄宜男草既而挙児因喜賦謝 共之、堂名優游。

（『奠陰集』詩集）

一束宜男緑葉春、今朝喜看掌珠新。祝児長記生芻兆、要似優游如玉人。

和東庵哭児韻（『奠陰集』詩集）

幾度懸弧慶、都為砕玉哀。鄧家千載恨、天意意悠哉。

其二

朧梅一夜花、寒庭影皓潔。怪来入春零、知是半枝雪。

其三

閑居哀絶調、攬涙勧加餐。半百期雖晩、有身何所難。

竹山の長女（第3子）（一七六一～一七六一）

『奠陰集』詩集「傷幼女」六首（宝暦十一年）にて傷まれている「幼女」が竹山の長女で第三子と思われる。この長女も生年の内に死亡したが、生後「七月」は生存しているので、宝暦十一年の前半に生まれ、同年の後半に死亡したものとなる。

傷幼女（『奠陰集』詩集）

而生七月沈痾迫、薬石空具意自迷。急呼醇酎滌腸熱、已聴家人環枕啼。

其二

孤抱早期桃李求、百年苦楽一朝休。偏痛老慈空榻夜、含錫遺愛不耐秋。

其三

阿母呑声起整衣、一爐香火小屏囲。未解盤中梨栗味、痴魂応向乳頭帰。

其四

児死曽知追伯道、女已不得学中郎。自今無意熊蛇夢、一枕唯添一断腸。

其五

眼看嬌骨没榛荊、天性何人問軽重。夷甫当年無卓識、漫文凡聖説鍾情。

其六

昇平生歯逐年多、不有殤亡若老何。夭人寿我真私計、余地憐而留与他。

竹山の三男（第4子）阿蘇（一七六二～一七六三）

『奠陰集』詩集「加藤清叔唯有両女予得両児一女皆夭今茲壬午七月各挙児寄此志喜」の詩題より、宝暦十二年（一七六二）七月にまた男児（第四子で三男）を得たこと、それまでの二男一女はすべて死亡していたことを知る。また「祭阿蘇児文」に「汝二兄一姉、已短折於往。汝阿蘇亦夭没於今。」「初三子之生、皆不出其歳而亡。独汝能踰歳。」とあるので、宝暦十三年までに竹山は三男一女を得たが二男一女はすべて年内に死亡したこと、第四子（三男）阿蘇のみが踰年して翌年三月に死亡したことを確認できる。

はじめて得た健康な男児を、竹山夫妻のみならず竹山の母も溺愛していたらしく、急病死した阿蘇への祭文には、彼らの絶望と悲哀の様が具体的に描写されている。「我嫗慟哭、自恨死之不汝先、」や「汝母漲乳、与涙俱迸。欲与汝同死、抱汝以入地。」などの句は悲痛を極めるが、竹山の母（植村早（ヤ））は結局七十四歳の長寿を保ち、十八人の孫のうち十四人に先立たれた。

加藤清叔唯有両女予得両児一女皆夭今茲壬午七月各挙児寄此志喜

（『奠陰集』詩集）

得女無男耐悩意、夭男喪女更傷神。一園草木堆床帙、今日同為有後人。

其二

豚犬猶期箕付業、龍駒尤祝発家声。懸弧共及中元節、不用銀盤弄化生。

祭阿蘇児文（『奠陰集』文集）

嗚呼汝阿蘇。有生必有死、維物之常。修短夭寿、皆天也。奚容喜悲於其間。然均之天也。汝二兄一姉、已短折於往。汝阿蘇亦夭没於今。胡無一人従其修焉。胡無一人為其寿焉。吾不能無惑矣。初三子之生、皆不出其歳而亡。独汝能踰歳、豊肌健哺、無徴疾可指。家人皆曰「今而得真児矣。」外人僉曰、「子慶始得後矣。」我亦信其然、鍾愛特至。詎図暴疾不可薬、両日夜而逝。汝猶若此、雖有継出乎。益不可恃、我媼慟哭、自恨死之不汝先、老而罹斯凶。汝母漲乳、与涙俱迸。欲与汝同死、抱汝以入地。我居其両間、上慰下喩、口雖不言、心実如割。嗚呼、自汝之生、我媼暨汝母、日夕所営為、莫非汝事。汝在母腹、則媼為製枕衾。汝倚媼膝、則母為裁繻綳。先春作春衣、先夏作夏衣、長短寛搾、相議相謀。量饑較寒、夙哺夜衣、求苛伺癢、更抑迭搔。偶勝戯玩、争陳以供孩笑。我之与汝叔、雖男職之不暇、時亦助其労。今而後百事頓廃、宜乎其難為情。嗚乎、使汝幸而寿、或頑率無行、辱其先、則不如死之久矣。安知非天恵先徳、蚤除不肖子。雖然父子之情、慮不及此。溺愛之愚、唯望其成立。常祝汝能言、先教之唯、呼媼呼爺嬢。何日能行、何日能食、三歳而丱、五歳而袴、八歳而外、誨督帥礼。汝能読書、乃伝以家学。汝修文辞、則有汝叔在。汝学字画、則有吾君彝在。汝学国詩、則有吾子常在。凡社友之良、可則可倣、文行日敦。既冠既昏、既挙其子、先男邪女邪。見卵而求時夜、昔人所嗤。何我大早計。万不可償一。汝忽然為異物。抑汝幸而才成行立、若無耆艾之寿、亦不如死之遄矣。使汝弱而死乎、遺字在箧、残篇在机、我視之、豈今日之比哉。使汝壮而死乎、少嫠在室、朝慟夕号、姑婦相持、慘不可言。使汝強而死乎、幼孤満前、顒顒何怙、我亦老且死、家随流離。今汝之夭、実我之幸。毎遅一歳、輒当加一衰。哀哉哀哉。我言止此。至痛在心、辞不能文、句不能韻。聊伸腷臆、以告溟漠。汝未能言、何解我文。然死者有霊、請誦此言、以見汝祖於地下。汝祖必恫汝来之速。而諒我言之切。乃奠汝柩、以香一炷菓一盂。汝雖未暗臭味也、強為我饗。癸未三月

竹山の次女（第5子）阿絲（一七六四～一七六五）

『奠陰集』詩集「生女自謔」に「竹山無嗣」とあり、明和元年に竹山がまた女児を得たこと、およびこの時点で竹山に男子が生存していないことが確認できる。また「甲申仲夏予挙女児常以国詩見賀併恵描金雪竹杯因歌此一闋以和謝」との詩題によってこの女児の生年月が確認される。翌明和二年十月十八日の詩で竹山は「予連夭五子」と題しており（後述）、この次女はそれまでに死亡していたらしい。

ところで明和元年とは、竹山が妻の実家である葛野革島家へ一年ほど滞在してその財政を立て直した、その出発の年でもある。『西岡集』（明和元年八月八日序）の冒頭に「携妻子赴西岡舟中即事」と題する詩があるのを信ずれば、阿絲は明和元年八月に竹山夫妻と共に葛野へ向かったこととなる。『西岡集』にはまた「予連産四子皆夭今茲二月季女阿絲嬰疾以四月二

日。又殤意忽忽不楽廃絶筆研間寓西岡閲旧詩巻止於二月五日作乃惻然得一絶」と題する詩もあり、「阿絲」の名と四月二日という没日が確認できる。阿絲は明和元年五月生、翌二年四月没となる。

なお『懐徳堂紀年』明和元年（一七六四）五月に「竹山挙女。」とある。

生女自虐（『奠陰集』詩集）

竹山無嗣意蹉跌跎、生女何由喜色多。試思辱祖傾門事、未必熊羆勝虺蛇。

甲申仲夏予挙女児常以国詩見賀併恵描金雪竹杯因歌此一闋以和謝（『奠陰集』詩集）

居士好飲有寛腸、此来嚢罄不能常。有時交游載酒過、恨対聖賢持破觥。錦里故人情意深、藤箋一幅寄清吟。加遺雪竹朱髹盞、雪装抹銀竹描金。意謂賀我虺蛇吉、歳寒非復蒲柳質。詞高器美不相下、頓看看輝照蓬蓽。此物交錯盛香麹、一場能可一飲斛。愛翫細推言外意、寄托深遠多涵蓄。雪期皎潔肌膚麗、竹祝堅貞風操厲。其朱孔陽勧為裳、金性従革警専制。酒徳由来並女徳、閨幃応慎中饋職。領略微旨喜無窮、何翅献酬生気色。除却良会暢飲時、十襲珍蔵戒捐虧。女児長大于帰日、挙此一醮終口貽。

予連産四子皆夭今茲二月季女阿絲嬰疾以四月二日又殤意忽忽不楽廃絶筆研間寓西岡閲旧詩巻止於二月五日作乃惻然得一絶（『西岡集』）

一自阿絲病且亡、閑箋累月闕篇章。受刃割来何太脱（ママ）、愁腸断尽乃詩腸。

竹山の三女（第6子）布美（一七六六）

明和二年、竹山妻と履軒妻はほぼ同時期に妊娠していたが、このうち履軒妻が先に男児を出産した（明和二年十月十八日）。竹山は、弟の長子誕生に対して以下のような七言五首を詠んでいる。

予連夭五子弟処叔未有子家慈忽忽不楽今茲娣姒同有身娣以十月十八日挙男賦此志喜（『奠陰集』詩集）

慈闈頻負含錫楽、吉夢不論熊与蛇。已向旧枝函桂子、且於新畹吐蘭芽。

其二

老慈昧爽呼長婦、藁草忙伝少婦閨。昆弟躑躅天色白、已聞呱爾一声啼。

其三

快覩鸞雛初出殻、意危未敢問雌雄。家人忽唱懸弧字、抃躍直将凌上穹。

其四

乙酉十月十八日、履軒幽人題弄璋。誰知天地純陰候、先向家庭復一陽。

其五

阿弟掌中珠得一、乃兄心裏喜無双。欲仮文詩発舒尽、世間何有筆如杠。

なおこの男児（履軒の長男）は、後述するように、翌安永二年の冬までには死亡していたらしい。

遅れて竹山妻は、翌明和三年の正月二十八日に女児（布美、竹山の三女で第六子）を出産したが、これも同年十一月二十七日に死亡している。

『奠陰集』文集「女布美埋銘」に「我三男二女皆亡、今又夭汝。」「又挙六子矣。」とある。すなわち布美は竹山の三女で第六子となることが確認される。また『奠陰集』詩集「哭女布美三首」に「七孫何事一孫無。」と、自注に「余夭六子、弟夭一子。」とあるので、明和三年までに竹山が六子を得ており同年までにすべて死亡していたこと、および前年に生まれた履軒の長子もこの時までに死亡していたこと、履軒の長女（鹿）がこの時点でまだ生まれていなかったことがわかる。

なお『懐徳堂紀年』明和三年（一七六六）に「正月二十八、竹山挙女布美。十一月二十七日夭。」とある。また『懐徳堂先哲遺事』に「蕉園ニハ三兄三姉アリタレドモ、相継ギテ夭折シ、其後ニ蕉園ガ生レタルコト故……」とある。

予喪女布美日適得処叔憶予詩攬涙和二首（『奠陰集』詩集）

来詩曰、形影今分離、両地長凄酸。夜夜各挑灯、応照往来魂。
又曰、夜夜魂飛去、在君残灯辺。請看睡覚時、君影是吾身。
爾写還郷夢、字字極悲酸。豈知屋梁外、別有不帰魂。

其二

女死猶在褥、挙室啼枕辺。新詩床下落、擬為阿弟身。

哭女布美三首（同）

其一代慈幃

老去頻頻砕掌珠、中腸寸断仰天呼。我子未虧先世徳、七孫何事一孫無。予夭六子、弟夭一子。

其二代内

家人夜買瓦棺還、攬涙停啼嘱小鬟。手製香繃喜玩物、悉心収集着棺間。

其三自述

懐抱為家乳作粮、小孺未弊一生軽。全愈乃父饑寒迫、折券通財煩友生。愈、平声。与去声義同。

子常以国詩寄弔走筆和之（同）

幾度蘭芽茁、霜前相逐摧。故人諳此況、佳句解餘哀。

女布美埋銘（『奠陰集』文集）

嗟我何罪于天。我三男二女皆亡。今又夭汝。号為明和、歳在丙戌。汝布美、以其正月廿八日生。而死於十一月廿七日。亦胡忽諸。汝比他児、哺最健、而肌膚能実。然不可恃焉、則亦竟不可恃焉。哀哉。抑吾聞之也、不娶無子為不孝。我既娶矣、又挙六子矣。其不育、天也。我獲免矣夫。銘之曰、

時一周　汝之寿　汝安丘　我在疚

竹山の四男（第7子）蕉園（一七六七～一八〇三）

『奠陰集』詩集「十二月十八日盤吉児晬日」に見える「盤吉児」が蕉園であろう。蕉園は他に「阿厳」「阿盤」などの呼称でも呼ばれる。蕉園の壙誌（「中井家歴代襄事録」）に「以明和丁亥十二月十八日生」「享和癸亥八月四日卒、年三十有七」とあるので、蕉園の生没年月日は明らか。

なお『懐徳堂紀年』明和四年（一七六七）に「冬十二月十八日、中井蕉

園生。」、享和三年に「八月四日、中井蕉園卒。」とある。

蕉園は初室淡輪ヌイとの間に一男を設けたが夭逝、継室川北氏との間に一男一女を設けたが男児は夭逝、女児(照)は碩果の養女として稲垣見立へ帰いだ。なお『懐徳堂考』が蕉園の継室を「北川氏」とするのは誤倒。

十二月十八日盤吉児啐日(『奠陰集』詩集)

仮此別歳酒、開児啐日筵。葛巾既已漉、寒厨聊撃鮮。小襦雖不麗、山妻預斡旋。豊肌襲冬服、扶床尚傾顛。賓明斉笑賀、婦女競頤憐。家人攢百玩。参差列児前。不願取干戈、方属承平化。朔陲近授甲、何必発閭左。不願取俎豆、礼楽崩壊辰。王室弁髪文献乏。覇政擯儒似嬴秦。不願取簡冊、括読家書膏鋒鏑。不願取翰墨、筆補造化終無益。不願取貨幣、方兄於我如讐敵。願取偶勝尋常資、目下随分且遊嬉。乃公不論他年業、為龍為豬任汝為。

哭男曽弘(『奠陰集』詩集)

天欲開文運、授我以而才。奪年何太早、文運竟難開。失声匪私慟、併為日東為。

竹山の五男(第8子) 休吉(一七六八〜一七六九)

『奠陰集』詩集「休吉児壙志」に「児之生也、歳為明和戊子(一七六八)、月為仲冬、日為長至之晨。於今為第二子。」「其殤也、歳己丑、月季夏、日在小暑前一日。嗟哉我八子、三男三女已夭。而今亦如此。」とある。故に、休吉は竹山の第八子で五男。竹山の子としてこのとき唯一生存していた阿厳(蕉園)は、第七子で四男となる。竹山は連年の男児出産を「両年両度懸弧喜。」と喜んでいるが、この男児も生後半年ほどで死亡した。

なお『懐徳堂紀年』明和五年(一七六八)に「冬十一月、竹山挙男休吉。」と、同六年六月に「竹山男休吉夭。」とある。第二次北山文庫「蕉園年譜資料」(80CL03175)が休吉を明和六年生とするのは誤。

賀子寵挙児(『奠陰集』詩集)

琴瑟相和少壮時、桑蓬今日未為遅。階庭行看交加蔭、玉樹先抽第一枝。

予嘗夭六子去年挙盤吉児今年挙休吉児習之有詩見賀依韻和答(同)

久嗟有子而無子、安得螽斯与君似。即今全医断後腸、両年両度懸弧喜。

喪休吉児和子常国詩(同)

謝君厚誼弔摧蘭、持贈一篇三十字。情深語妙泣傍人、況又千秋亭下涙。

休吉児壙誌(『奠陰集』文集)

児之生也、歳矣明和戊子、月為仲冬、日為長至之晨。於今為第二子。故命以復二、曰休吉。其殤也、歳己丑、月季夏、日在小暑前一日。嗟哉。我八子、三男三女已夭、而今亦如此。可不痛慨乎。其将瘞也、餞以詩。其辞曰、

門左懸弧日幾何、櫝中毀玉涙滂沱。莫言雛雁離群早、短羽相随地下多。

竹山の六男（第9子）午吉（一七七〇～一七七七）

五男が明和六年十一月に、七男が同八年八月（後述）に生まれておれば、六男は明和七年（一七七〇）の冬頃に生まれていなければならない。また「竹山居士去歳亡両嬰今茲丁酉春又喪午童一慟作此詩為奠」の詩題から、午吉が安永六年に死亡したことがわかる。「去歳亡両嬰」とは安永五年に死亡した八男阿作と九男阿末を指すものであろう。

『懐徳堂紀年』安永六年（一七七七）「竹山亡児午吉。」とある。

竹山居士去歳亡両嬰今茲丁酉春又喪午童一慟作此詩為奠

（『奠陰集』詩集）

豈料蘭苗春又萎、撫床双涙乱如絲。莫言居士多夭折、始哭諷書学児字。諷、音風。

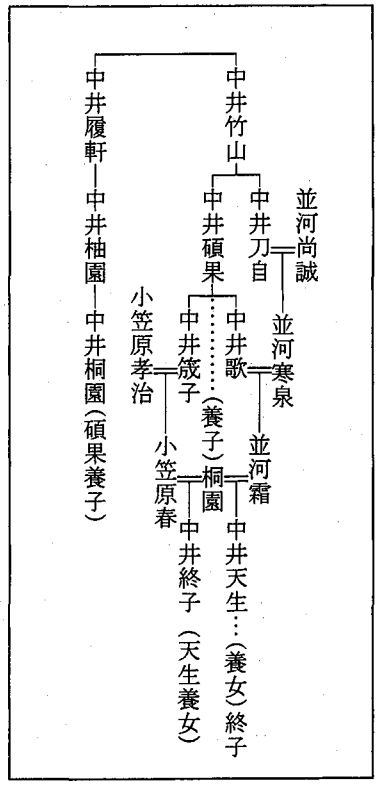
竹山の七男（第10子）碩果（一七七一～一八四〇）

碩果は通称を「七郎」とするが、碩果と同年に生まれた履軒の次男（一七七一～一七七五）が「八郎」と呼ばれた（竹山「介婦貞曜革島氏壙誌」）のは、竹山・履軒兄弟の男児を通算したものか。ただし、だとすれば明和二年に生まれ夭逝した履軒の長男（通算第四男）を無視して蕉園（竹山の四男、通算第五男）を「四郎」と数え、碩果を「七郎」としたこととなる。

なお『懐徳堂紀年』明和八年（一七七一）は「是歳、中井碩果生。」と、天保十一年に「春三月二十四日、碩果卒。」とある。三善貞司編『大阪人物事典』（清文堂、二〇〇〇年）が碩果を竹山の「第八子」とするのは何に基くものか未詳。

碩果は篠田娣（ケイ）との間に一男八女を設けたが、長男震太郎・次女菅・三女梅・五女操・六女伏は夭逝。長女筬子は小笠原孝治へ、四女歌（ウタ）（御田（オンタ））は並河寒泉へ、七女婉（栗）は篠脇正元へ、八女信（榛。羽倉敬尚の祖母）は並河尚教へ、それぞれ帰いだ。

なお、寒泉と歌（ウタ）との従兄妹婚により並河霜（シモ）（中井桐園の前室。績（ウミ）・天生・蘭の母）が生まれているので、天生は履軒の曽孫（履軒→柚園→桐園→天生）・竹山の義理の曽孫（竹山→碩果→養子桐園→天生）であると同時に、母方からは竹山の玄孫（竹山→刀自→寒泉→霜→天生、かつ竹山→碩果→歌→霜→天生）となる。また筬子は小笠原春（シュン）（順とも。桐園の後室。二郎・二三（フミ）・終子の母）を生んでいるので、終子は父系としては天生と同じく履軒の曽孫・竹山の義理の曽孫であると同時に、母方からは竹山の玄孫（竹山→碩果→筬子→春→終子）でもある。



天生・終子は異母兄妹であると同時に再従兄妹でもあり、竹山・履軒の血を最も濃厚に継ぐ者であって、彼らを単に「履軒の曽孫」とのみ称するの

は充分ではなかろう。

介婦貞曜革島氏壙誌（『奠陰集』文集・「中井家歴代襄事録）

婦諱三輪、姓源。世為京師之野革島邑著姓。因氏焉。其失芬華則久矣。十世之上、蓋分系於吾婦家云。故予得撰以卜柔日於弟処叔名積徳。雖不及於舅、而事姑家婦、孝敬以穆、恩如母子姉妹。既而従夫子寓長港、来往怡如、猶前日也。然若喪姑恃、前後又夭男女子二。忽忽不楽、安永紀元之冬患風痎、荏苒至大疾、以二年夏四月十有八日終。齢初二十有七。塋在吾先塋側。所生季之存者曰八郎、三歳。廑虞水火於新乳者。家素清窶、生無以飾容、死無以備礼。弟亦晩昏蚤矜。是皆可哀矣。代名以貞曜、隨系之銘。

竹山の四女（第11子）三寿（一七七二～一七七三）

「祭女三寿文」（文集、安永二年（一七七三）閏三月庚午、竹山四十四歳）に「積旬二十有五」とあり、三寿は安永元年（一七七二）生となる。

「祭女三寿文」は「汝之三兄二姉」が夭逝したことを述べ、ついで「後挙五子」のうち「三子」が生存、「二子」が没したとする。よって三寿は竹山の四女で第十一子となる。安永二年時点で没していた「二子」は布美と休吉。同文はまた「既有三男、後嗣以固。」とするが、安永二年閏三月の時点で生存していた「三男」とは四男蕉園（7歳）・六男午吉（6歳）・七男碩果（2歳）。

「布美」に対して「我三男二女皆亡、今又夭汝。」と述べておれば、布美が三女であることは動かせまい。四女以降である三寿が夭逝しており刀自と同一人物ではない以上、刀自はすくなくとも五女以降となる。すなわち冒頭にて述べたように、丸川松陰が竹山の壙志に「九男四女」と記したのは疑問。

喪幼女三寿（『奠陰集』詩集）

男承家世一経足、有女無那奩具資。蒼天蚤識窮如此、不奪男児奪女児。

祭女三寿文（『奠陰集』文集）

維歳之癸巳、暮春之閏、日之庚午。阿爹竹山居士奠于幼女三寿瓦棺前。以菓一盤茶一盂、攬涕告之曰、嗚噂汝之凛乎天、而為人子、為人妹、廑廑焉積旬二十有五。摧蕙蒲、毀匣珠、天性所存、何必倣鍾情於夷甫。抑心乎窈有感焉、初汝之三兄二姉、嬰抱相継而故。緩急百状、皆同一痾。時有一医士云、「育之不易、多係阿母。胞固成癥、乳或醸瘕。」再占夢祥、請試哺於佗。事類厭勝、信与疑伍。後挙五子、其二自鞠、而三買奶者。三子皆遂、二子踏覆轍之忽遽。親朋同辞、嘆於医言之弗誤。汝之初胎、予有東游之挙、嘱汝母曰、高陽弊衣之鬼来自韓氏、久客于我。麾而不出、動息必与我俱。乃知斯游亦且倦。而甘輭之益難措。仮令無埋児之激、且殺冗費於何物乳嫗。損卑而益尊、豈神所悪。及還則門右已設悦、厥声呱呱。家人姑名以三寿、以咨於予。予曰、善矣命之。未希中之与上、我足於其下。荘子、上寿百歳、中寿八十、下寿六十。已而充膚豊肉、日夕健哺、老慈鍾愛、毎謂予曰、「姒氏手鞠之如茲、無復可懼。既有三男、後嗣以固。天寵老婦、復添孫女。」慰吾目前、璋不如瓦。予亦以為得計、自安故歩。賀者出門、弔者望閭。今而一疾、弗興弗瘖、匪天降災、実我殺汝。非我也、五窮合謀、逞其毒痛、鬼兮鬼兮。傷哉貧乎。又自謂、我之覯斯閔、固夙之所悟。凡世之吉凶慶殃、不彼

則此遇。通人達観、復奚控訴。崇高之位、重門而層闥。尚不禁闌入於二豎。況乎茅茨之底、湫溢卑湿。恣抵触於霧露、頌祷之深、以万其寿焉。尚有短折之虞。況乎唯三其寿焉、曷怪乎其不。噫嘻不祭之殤、恩情永謝、哀哉哀哉。尚一饗以去。

竹山の八男（第12子）阿作（一七七四～一七七六）

「幼児阿作埋銘」により、阿作なる子が安永五年七月四日に病死したことがわかる。「生廛三稔。」とあるので、安永三年（一七七四）頃の生か。三寿と阿作との間に子が無ければ、阿作は竹山の八男で第十二子となる。

なお『懐徳堂紀年』安永五年七月に「亡阿作。」とある。

幼児阿作埋銘（『奠陰集』文集）

天憫吾貧、既減我姓。是歳春夭末児。作汝又死、胡然亡幸。安永暦五、支申干丙、日維初四、月属孟秋。革島氏之出、氏為中井。生廛三稔、酷哉一病、有慧不年、命乎維命。家人撫床、号慟気硬、虞棺以窆、東崗之壙。喜而銘者、乃父伯慶。

竹山の九男（第13子）阿末（一七七五～一七七六）

「阿末児埋銘」により阿末は安永四年生、同五年二月二十四日没となる。竹山の九男で第十三子か。

なお『懐徳堂紀年』安永五年二月に「竹山亡児阿末。」とある。

阿末児埋銘（『奠陰集』文集）

末耶末耶、橘家季父、名積善。母源氏、乙未懸弧、丙申夭。是日廿四、月是二。先瓏松楸、一掬土瓦、棺以窆于已矣。

竹山の五女（第14子）刀自（一七七七～一八〇三）

竹山の壙誌に「季女帰並河尚誠、生二男一女而亡。」とあり、三女布美、四女三寿とすれば刀自は第五女以降となる。三寿・阿作・阿末と刀自との間に子があったことは知られず、刀自は竹山の五女で第十四子となろう。誓願寺の墓石に「享和三年癸亥六月五日卒」とある。

年表

宝暦6（一七五六）		革島順（16歳）が中井竹山（27歳）に帰ぐ。
同年	11月	竹山長男（第1子）生。旬余にして没。
宝暦8（一七五八）春		竹山次男（第2子）生。夏までに没。
同年	6月17日	竹山父甃庵（66歳）没。
宝暦11（一七六一）前半		竹山長女（第3子）生。
同年	後半	竹山長女（満7月）没。
宝暦12（一七六二）7月		竹山三男（第4子）阿蘇生。
宝暦13（一七六三）3月		阿蘇（2歳）没。
明和元（一七六四）5月		竹山次女（第5子）阿絲生。
同年	4月2日	阿絲（2歳）没。
明和3（一七六六）正月28日		竹山三女（第6子）布美生。
同年	11月27日	布美（当歳）没。

明和4(一七六七)12月18日　竹山四男(第7子)　蕉園（阿厳）生。
明和5(一七六八)11月13日　竹山五男(第8子)休吉生。
明和6(一七六九)6月3日　休吉(2歳)没。
明和7(一七七〇)冬　竹山六男(第9子)午吉生。
明和8(一七七一)8月　竹山七男(第10子)碩果生。
安永元(一七七二)8月頃　竹山四女(第11子)三寿生。
安永2(一七七三)閏3月11日　三寿(2歳、満25旬)没。
安永3(一七七四)　竹山八男(第12子)阿作生。
安永4(一七七五)　竹山九男(第13子)阿末生。
安永5(一七七六)2月24日　阿末(2歳)没。
同年　7月4日　阿作(3歳)没。
安永6(一七七七)春　午吉(8歳)没。
同年　11月　竹山五女(第14子)刀自生。
天明5(一七八五)8月26日　竹山母植村早(74歳)没。
寛政元(一七八九)4月1日　竹山妻革島順(49歳)没。
享和3(一八〇三)8月4日　蕉園(37歳)没。
同年　8月13日　刀自(27歳)没。
文化元(一八〇四)2月5日　竹山(75歳)没。

（本センター職員）